

○小板橋 恵美子 沖田 富美子
(日本女大)

【目的】車いす使用者の住宅環境は、車いすの行動特性に合うように改造・改善が行われるのが一般的である。本研究は車いす使用者家庭の住居に必要な基礎的資料を得ることを目的とする。本報では、特にバリアが多いとされるサニタリー空間に焦点を当て、車いす使用者家庭の生活上の問題点や車いすを使用しない家族の生活意識等について報告する。

【方法】関東地域に居住している、脊髄損傷による車いす使用者のいる家庭5例を対象に、サニタリー空間（トイレ、浴室、洗面所）に関する実態調査及びヒアリング調査を実施した。調査実施時期は1999年6月～10月である。なお調査対象の車いす使用者はすべて男性であり、家族はすべてその妻である。

【結果】すべての家庭でサニタリー空間の改造・改善が行われているにもかかわらず、車いす使用者、家族ともに不便さを感じているのが実状である。車いす使用者が日常生活上不可能だと思ふ行為としては、車いす使用者が「掃除全般」をあげているのに対し、家族は1名のみである。介助については、車いす使用者（全員）、家族ともにサニタリー空間の使用に当たっての「介助は必要ない」とする者が多い。しかし掃除行為は家族が担当しているのが実状であり、この行為については両者共に介助の一つであるとはとらえていない。なお現在の生活に対し家族は、家族としてのまとまり、やさしさ、生活に対する意識の向上など精神的側面については肯定的に評価しているが、今後高齢になったときの介護負担や災害が起こったときの避難などの側面についての不安を感じている。